病院図書館　2005；25(1･2)：24-27

特集２　総会・事例報告会（第107回研修会）

# 当院の図書館管理システムについて

井上 智奈美

## Ⅰ．はじめに

当院の図書館管理システムは、既製品ではなくファイルメーカー Pro で作成した独自の管理システムです。ファイルメーカー Pro とは、簡単にいうとデータベース作成ソフトのことです。これを使用すれば、特別なプログラム言語を覚えることなく、自動的な処理プログラムをもつデータベースを作成することができます。

図書室の主な管理データは、次の５つに分けられています。

１．『単行本』
２．『雑誌』
３．『相互貸借』
４．『利用者への公開用』
５．『利用者用貸出』

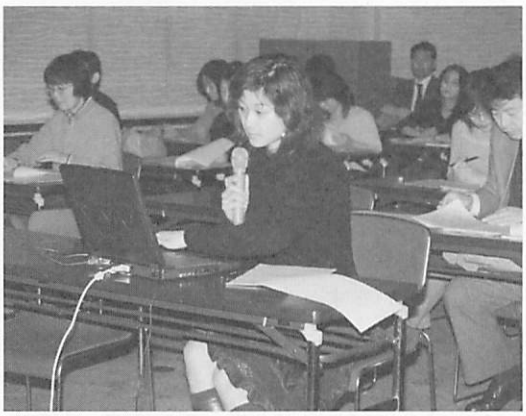
では、この５つについて順番に説明していきます。

## Ⅱ．『単行本』

『単行本』には次の５つのデータがあります。

１．「単行本：基本データ」（書誌事項など）
２．「code-ISBN」（出版社のデータ）
３．「code-series」（シリーズ名など）
４．「単行本：貸出」（貸出状況のデータ）
５．「単行本：返却」（返却された貸出データ）

「単行本：基本データ」には、単行本の書誌事項などを登録しています。「code-ISBN」には、ISBN の出版社コードと出版社名を登録しています。「code-series」には、シリーズもの



の場合にシリーズ名などの情報を登録しています。「単行本：貸出」には、誰がどの単行本を借りているかという貸出状況を登録しています。貸し出されていた資料が返却されると、「単行本：貸出」から「単行本：返却」にデータを移動させます。それが蓄積されたものが「単行本：返却」になっています。

それぞれのデータは、必要に応じてリレーション機能[注1]などを使用し、同一内容の入力や動作を省略することができます。

『単行本』の具体例をあげます。

図１の左上が単行本の書誌情報などを登録している「単行本：基本データ」の画面です。書名、著者名、分類など、ここに表示されているすべての項目で検索が可能です。図１の右下は「単行本：貸出」の画面です。ここでは、誰が何を借りているかというデータを登録しています。左上の「単行本：基本データ」の中にある貸出状況は、右下の「単行本：貸出」から貸出

いのうえ　ちなみ：三菱京都病院　図書室
m-sui@fa2.so-net.ne.jp

注１）別データから内容を参照する機能のこと。

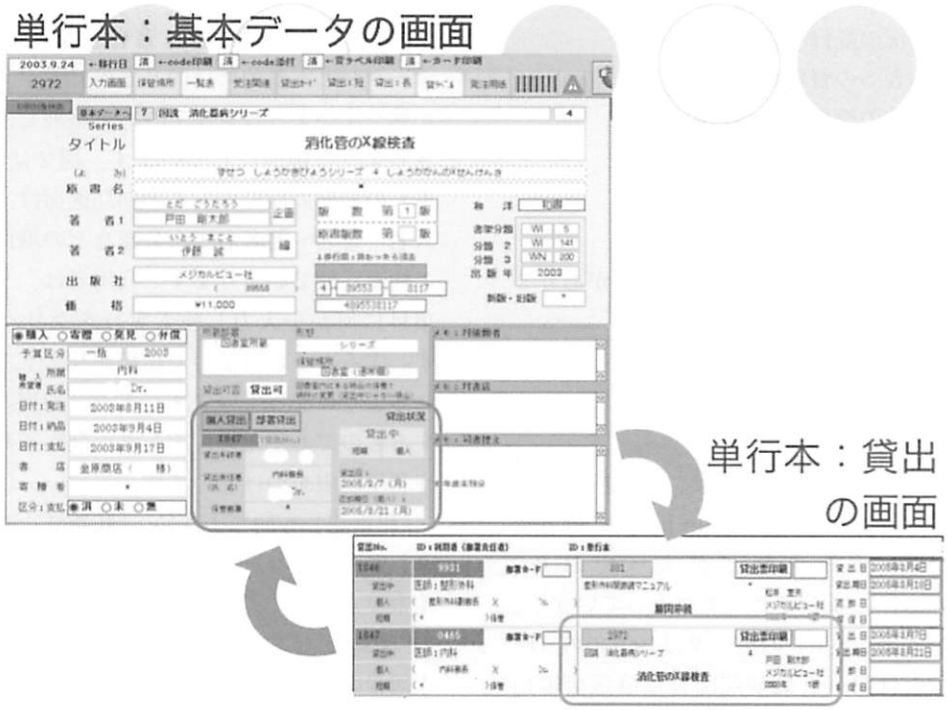



図1.「単行本」の具体例

状況を参照しています。逆に右下の「単行本：貸出」の画面では、書誌事項を「単行本：基本データ」から参照しています。

このように、別データから内容を参照することで片方のデータでの入力を省略することができます。

『単行本』のデータを使用して行う作業は、

- 単行本書誌事項の登録・検索
- 装備品（請求ラベル・貸出カードなど）の印刷
- 受入案内リストの印刷
- 貸出状況の登録・検索
- 未返却者への督促状の印刷
- 書店への発注依頼用紙の印刷・FAX 送付

などです。

## Ⅲ.『雑誌』

『雑誌』も『単行本』と同様に、5つのデータから構成されています。

1.「雑誌：タイトル」（書誌事項など）
2.「和雑誌：基本データ」（1号単位の和雑誌）
3.「洋雑誌：基本データ」（1号単位の洋雑誌）
4.「雑誌：貸出」
5.「雑誌：返却」

「雑誌：タイトル」には、雑誌名などの書誌事項が登録されています。「基本データ」は、和雑誌と洋雑誌に分かれています（もともとは同じでしたが、データ量が多くて壊れたため現在は分けています）。ここには、1号ごとのデータ（巻・号・特集記事名など）を登録しています。残りの「雑誌：貸出」と「雑誌：返却」は、『単行本』の場合と同じ役割になっています。

『雑誌』のデータも『単行本』のデータと同様に、リレーション機能などを使用し、入力や動作を省略しています。

『雑誌』で行う作業は、

- 雑誌書誌事項の登録・検索

- 受入案内リストの印刷
- 貸出状況の登録・検索
- 未返却者への督促状の印刷
- 未着雑誌の管理・督促状の印刷

などです。

## Ⅳ.『相互貸借』

『相互貸借』には次の３つのデータがあります。

1.「Lettura」
2.「code list」
3.「mokuroku」

主に使用する「Lettura」は、依頼内容を入力蓄積するところです。「code list」には各依頼先の住所データなどが入っており、「mokuroku」には所蔵データが入っています。ただし、「mokuroku」のデータは1997年の「医学雑誌総合目録（近畿病院図書室協議会編）」がもとになっており、現在は所蔵確認の機能はなく、雑誌名の呼び出しにしか使用できていません。

これらのデータを使用して、相互利用のための申込書の作成や、文献受領後の支払いに関する処理（料金の入力・料金通知書の印刷など）を行います。

## Ⅴ.『利用者への公開用』

『利用者への公開用』のデータは、次の４つです。

1.「とくとくとぴっく」
　（株式会社サンメディア提供）
2.「単行本」
　（「単行本：基本データ」を取り込み）
3.「和雑誌」
　（「和雑誌：基本データ」を取り込み）
4.「図書室だより」

ここに挙げたものは、すべて院内のイントラネット上で公開しているものです。

「とくとくとぴっく」のみ既製品ですが、同じくファイルメーカー Pro で作成されています。

「単行本」は、さきほどの「単行本：基本データ」と本質的には同じものですが、利用者が見やすいようにレイアウトを整理し、検索できるような画面にしています。図２は、「単行本」の初期画面です。この初期画面は、シリーズ名・書名・著者名・大分類などの項目がならぶ検索状態で始まります。利用者は、どこかの項目に何かを入力し検索実行をクリックします。するとそれに基づく結果がリストで表示されるようになっています。また、利用者が使用するものであるため、データが削除されないよう利用制限をつけています。

「和雑誌」も同じように、「和雑誌：基本データ」がもとになっており、特集名と雑誌名から検索できます。

「図書室だより」は、紙媒体で不定期に年４回程度発行しているものを、データ化したものです。紹介した記事のすべてが登録されているため、発行後、紙媒体の図書室だよりがなくても、ここを見ればイントラネットを通じて記事を読むことができます。

ファイルメーカー Pro で作成したデータをイントラネット上で公開するには、使用するすべての端末にファイルメーカー Pro が必要となります。当院では、図書室以外の部署もファイルメーカー Pro を使用しており、すべての端末分のライセンスが購入されていたため、公開にあたっての障害にはなりませんでした。

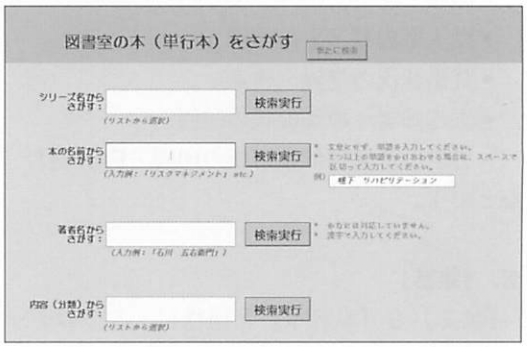



図２.「利用者公開用」単行本データの初期画面

## Ⅵ.「利用者用貸出」

今までに紹介した『単行本』や『雑誌』にも貸出状況を登録するデータがありましたが、これは利用者が貸出手続きをするためのデータです。

『利用者用貸出』には3つのデータがあります。

1.「貸出ファイル」(利用者入力用)
2.「User データ」(利用者 ID)
3.「所蔵データ」(単行本・和雑誌・洋雑誌の各「基本データ」)

「貸出ファイル」は、利用者が実際に入力するところです。「User データ」には、利用者の名前と利用者 ID を登録しています。「所蔵データ」には、図書室が所蔵する単行本と雑誌のデータを入れています。もとになっているのは、単行本・和雑誌・洋雑誌の各「基本データ」です。

このデータを作成する以前は、利用者が手書きで貸出手続きをしていたため、面倒といった声や、借りたという痕跡が残るのが嫌だというクレームがありました。司書側としても、利用者が間違った雑誌名や巻・号を記入した場合の登録が不正確になるという問題がありました。それらを解決する方法として、手書きから入力に貸出手続きを変更しました。入力へ変更するための前段階として、資料に ID ナンバーをつけ、バーコード化し、資料に貼付しました。

図3は、利用者が資料を借りる際に使用する貸出手続きの画面(「貸出ファイル」)の利用者操作手順です。まず一番奥の画面が初期画面です。画面中央にある「Go」をクリックすると、2枚目になり、利用者 ID である職員 code No. を入力します。すると利用者の氏名が表示されるので、正しければ「はい」をクリックします。そして3枚目になり、今度は資料のバーコードをバーコードリーダーで読みとります。正しく読みとることができれば、資料の書誌情報が表示されるので、正しければ「はい」をクリックします。初期画面(一番奥の画面)に戻り、貸出手続きは終了です。

手書きに比べて簡単で、記入間違いなどがありません。また、データ内容は司書しか見られないようになっているため、借りたという痕跡が他の利用者に分かることもありません。

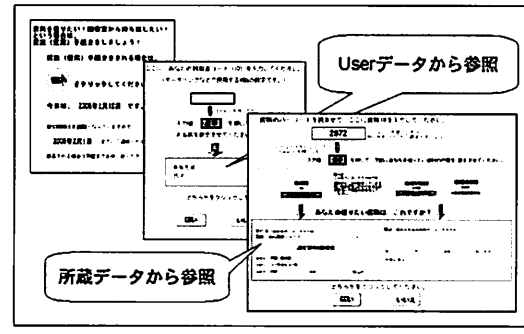



図3．貸出ファイルの利用者操作手順

## Ⅶ. おわりに

以上の5つが当院の図書館管理システムの中心となるものです。

そもそも、なぜ独自作成のシステムかというと、既成の図書館管理システムを購入する予算が無かったからではないかと思われます。また、独自作成のシステムでもやっていけるような小さな図書館だったことも理由のひとつでしょう。

独自作成のシステムのため、担当者にはファイルメーカー Pro の知識が必要となり多少の勉強が必要です。しかし、いったん覚えてしまえば、自分の使い勝手が良いように、いつでも加工が可能です。加工には手間がかかりますが、時間のあるときはそれが楽しく感じられる場合もあります。

今後の課題としては、煩雑になったこのシステムをなんとか整理したいと考えています。使用端末が Macintosh と Windows に分かれていることが、煩雑さに拍車をかけていますので、まずはそれから解決しようかと考えています。